〔論　　説〕

小野塚喜平次における政治学の胎動
―小野塚政治学のはじまり―（２）

沢　目　健　介

はじめに

本稿は従来の研究で触れられることのなかった、小野塚喜平次の学問的揺籃期ともいうべき学部学生時代に発表した社会主義に関する William Graham “SOCIALISM NEW AND OLD” 抄訳と社会問題研究会設立を求める新聞投書を全文紹介する。

小野塚喜平次は「わが国における科学としての政治学の創始者」「少なくともアカデミズムの政治学の創始者」[1] と評されている。前稿[2] で概観したように、小野塚政治学研究は蠟山政道『日本に於ける近代政治学の発達』（初版、昭和24年）における学問的位置づけがなされ、南原繁・蠟山政道・矢部貞治『小野塚喜平次』（昭和38年）では伝記的記述にはじまり研究者・教育者・大学総長としての管理運営者として総合的な小野塚研究がなされた。ついで田口富久治により政治学者小野塚の本格的な研究が始まった。さらに近年春名展生、佐々木研一郎、都築勉らにより小野塚喜平次研究の新たな展開が示されている。[3]

1　南原繁・蠟山政道・矢部貞治著『小野塚喜平次』、（岩波書店、昭和三八年、二八頁）。田口富久治『日本政治学史の源流―小野塚喜平次の政治学―』（未来社、一九八五年）。

2　南原繁研究会編「史料紹介　『交進雑誌』『長岡郷友会雑誌』に見る小野塚喜平次…小野塚政治学のはじまり（１）」（横濱大氣堂、2022年）。

3　蠟山政道『日本に於ける近代政治学の発達』（実業の日本社、昭和24年）、南原繁・蠟山政道・矢部貞治『小野塚喜平次』、（岩波書店、昭和38年、28頁）。田口富久治『日本政治学史の源流―小野塚喜平次の政治学―』（未来社、1985年）。春名展生『人口・資源・領土　近代日本の外交思想と国際政治学』（千倉書房、2015年）。佐々木研一郎「衆議院選挙革正審議会における小野塚喜平次―政治教育に関する議論を中心に」（『法政論叢』第56巻第2号、2020年）。都築勉『おのがデモンに聞け　小野塚・吉野・南

また、前稿では紹介できなかったが、清末・民国初における小野塚政治学の影響の広がりが明らかになり、新たな研究の展開が始まっている。従来、小野塚が「大正3年政法学校において中国人留学生のために、とくに政治学を」おこなった[4]とあり、その事実だけが示されていた。法政大学政法学校における小野塚の講義が中国社会へ与えた影響については管見の限りB.I.シュウォルツ、三谷太一郎の指摘[5]でわずかに知られるていどであった。『小野塚喜平次』によると、「大正3年に政法学校で講義」[6]を行ったとある。法政大学清国留学生法政速成科は梅謙次郎が1904（明治37）年に修業年限1年（のち1年半に延長）で設立し、1908（明治41）年廃止されており[7]約2000人の中国人学生が入学し、1215人の卒業生が卒業した。小野塚は少なくとも4年間講義をもったようであり、1905（明治38）年から1908（明治41）年まででではないかと思われる。政法学校に於ける小野塚の政治学講義が中国社会へ大きな広がりを持ったものであり、清末・民国初の中国の政治的変動の中で小野塚政治学の果たした役割が具体的に明らかになっている。

中国中山大学孫宏云教授は『小野塚喜平次与中国现代政治学的形成』《历史研究》2009年[8]で、小野塚の政治学が中国政治学の形成とこれを学んだ学生たちが実務に携わり、政治改革へ与えた影響を論じている。

小野塚は『欧州近代立憲政治一斑』のほか、すでに刊行していた『政治学大綱、上下二巻』を復習してまとめ、「政治学」の講義を行った。この講義本が

原・丸山・京極の政治学』（吉田書店、2021年）。

4　前掲、南原繁・蠟山政道・矢部貞治著『小野塚喜平次』年譜。

5　胡漢民の作品に、小野塚政治学の清末思想への広がりを示す一文であるというB.I.シュウォルツの指摘（平野健一郎訳B.I.シュウォルツ『中国の近代化と知識人　厳復と西洋』（東大出版会、1978年、267-268)。また、「胡漢民は小野塚の『政治学大綱』上巻、82-85頁等の関係個所を援用している」（三谷太一郎「日本の政治学のアイデンティティをもとめて—蠟山政道の政治学の構築—」（『学問は現実にいかに関わるか』（東京大学出版会、2013年、129頁)。

6　前掲、南原繁・蠟山政道・矢部貞治著『小野塚喜平次』年表、425頁。

7　法政大学広報誌『法政』（2014年度、Vol. 74、）および法政大学HPによる。

8　孫宏云：小野塚喜平次与中国现代政治学的形成　https://www.aisixiang.com/data/91866-2.html

少なくとも7種に翻訳・編纂され出版されたのである。[9] それらは、主に清朝末期の法政学学校の教科書として使用された。日本の法政大学法政速成科の中国人留学生たちにより編集出版されたのである。小野塚の政治学は、清朝政府の立憲主義化の意図に合い、清朝の公式知識として拡大・普及し、小野塚政治学は清朝末期の「政治学」のモデルとなり、中国の近代政治学の形成のための段階的な理論的枠組みと概念的なツールを提供したのである。[10] また、法政学校第5講習会卒業式1908（明治41）年で小野塚はが中国人卒業生に次のように語ったという。

「いまだ、政治学は十分に発達しているとはいえない。しかし独立した学問であることは間違いない。私が行ってきた講義は、政治的事実よりも学問としての政治つまり政治学に重点を置いた。政治の対象を学問として学び、学問としての政治と政治的事実を、無理に混合して学問の真理を追求することに支障をきたさないようにしたものである」。

この言葉は「内外の時事に対して幾多の意見と感慨と之なきにあらすと雖も学殖尚ほ浅くして見聞未た博からす自ら軽々に政論壇上に立つへからさるを信し寧ろ思想の自由界逍遥し群籍の間に盤座して古今の諸賢に接せんと欲す此書の如きも一に全く学術的にして毫も所謂政談的にあらさるなり」[11] という小野塚の『政治学大綱』自序の再現ともいうべきであり、「学問の自由と独立」の立場を闡明にしたものである。中国人学生に向けても学問の自由の尊さと、政論からの政治学の独立を教授したといってよい。

法政速成科の受講生は、ほとんどが高学歴で伝統ある学者や官職に就いている人たちであった。[12] この知的エリート集団は、清朝末期にとくに教育と法制改革の分野で大きな役割を果たしたため、彼らの知的構造や思想の変化が、

9　Ⅰ“法政丛编”版　Ⅱ“法政粹编”版　Ⅲ“法政讲义”版　Ⅳ　商务印书馆版　Ⅴ　江苏法政学堂讲义　Ⅵ　广东法政学堂讲义　Ⅶ《北洋法政学报》所刊《政治学大纲》である。

10　前掲、孙宏云：小野塚喜平次与中国现代政治学的形成。

11　『政治学大綱上巻』（博文館、明治36年、3頁）。

12　李暁東『近代中国の立憲構想』（法政大学出版局、2005年、1-2頁）。

清朝末期の教育改革や準備的立憲主義に影響を及ぼしたことは間違いないだろう。例えば、梁啓超は革命派と激しい論争を繰り広げたその際、小野塚の『政治学概論』をはじめ、多くの法律書や政治雑誌を参照し、小野塚を「日本における第一級の政治学者」、『政治学概論』を「政治学の最高傑作ともいうべき、最新かつ最も正確な学説の厳密な解説書」[13]と述べている。小野塚の政治学が、清朝末期の知的エリートの間で政治学に対する意識を高めたことを示唆している。

このように「科学としての政治学」創始者ともいわれ、北東アジアの世界にまで広がりを持った小野塚政治学について、本稿では青年期小野塚喜平次が故郷の『長岡郷友会雑誌』で発表した二つの作品の紹介とその成立の周辺、その知的関心の世界を検討することにより、小野塚政治学の始まりの一端を明かにしたい。結論を先取りしていうならば、社会主義と社会問題に関わる二つの小品の検討により、東京帝国大学の金井延との学問的つながり、もう一点は間接的ではあるが、徳富蘇峰の思想世界とのつながりが浮かび上がる。

1　William Graham“SOCIALISM NEW AND OLD”

小野塚は「社会主義批評両三片」を明治27年4月、5月、8月の3回に分けて発表した。原著はWilliam Graham著“SOCIALISM NEW AND OLD”である。1890年ロンドンのKEGAN PAUL, TRENCH, TRUBNER & CO. LTD. からTHE INTERNATIONAL SCIENTIFIC SERIES. VOL. LXXとして出版された。[14] Grahamは1886年にTHE SOCIAL PROBLEM. IN ITS ECONOMICAL, MORAL, AND POLITICAL ASPECTSを同じ会社から出版している

この本は当時注目されていたようであり、二種の翻訳版が発行された。1893

13　前掲、孙宏云：小野塚喜平次与中国现代政治学的形成による。

14　出原政雄「民友社の社会主義論」（西田毅、和田守、山田博光、北野昭彦編『民友社とその時代』（ミネルヴァ書房、2003年、12月、142頁）。HathiTrust https://www.hathitrust.org/ に全文掲載されている。グラハムおよびレーの略歴については、出原政雄が示している。同書、145－146頁参照。

（明治 26）年 8 月に平民叢書第六巻『現時之社会主義』（民友社）と、翌明治 27 年森山信規訳『新旧社会主義』（博文館）[15] である。この出版状況を見ると、抄訳ではあるが、小野塚によるグラハムの紹介は先見の明があるというべきであろう。森山信規訳『新旧社会主義』出版の博文館は新潟県長岡出身の大橋新太郎（この時 31 歳）小野塚（このとき 23 歳）が発行している点を考慮すると、小野塚の抄訳との関係は不明であるが、二人の関係が森山信規訳『新旧社会主義』出版のきっかけをうかがわせる。[16]

徳富蘇峰の民友社は平民叢書第六巻『現時之社会主義』を 1893（明治 26）年 8 月刊行した。この書は深井英五がグラハムの“SOCIALISM NEW AND OLD”を大幅に利用し、加えてレーの『現時の社会主義』（CONTENPORARY SOCIALISM）の二つの原著を利用して翻訳出版した。『現時之社会主義』出版が徳富蘇峰主導によるものか、深井英五の自主的選択あったかは明らかではない。[17]　同志社出身の深井英五は小野塚喜平次と同年生まれであり、社会主義については同志社でラーネッド博士に学んでいた。ラーネッド博士は日本の学校で最初に社会主義の講義を行い、同志社が初期日本社会主義史上の一潮流を形成するに大きな影響をあたえた教師とされる。[18] 博士は明治 11 年 1 月からフォーセットの原書をテキストに僅かであるが社会主義に言及したことが推測でき [19]、明治 12 年の講義案では明らかに社会主義に関説している。明治 12 年

15　後の社会主義者西川光次郎は、「予は如何にして社会主義者となりし乎」にこたえ、この二書を熟読したという。「民友社と博文館が余を社会主義者足らしむるの最初の手引き」と回顧している。前掲、出原政雄、140－141 頁。

16　『長岡郷友会雑誌』（明治 26 年 6 月号）には博文館創業者大橋佐平の５男大橋幹二新入会員とあり、その後小野塚とともに評議員の時期もあった。12 月号に博文館大橋佐平が会員欄に住所が記されている。また長岡出身の佐平三男博文館第２代館主大橋新太郎との交際も推測されている。前掲、南原等『小野塚喜平次』54 頁。

17　前掲、出原政雄、141-142 頁。

18　住谷悦治『ラーネッド博士伝―人と思想』（未来社、1973 年、242-243 ｒｔｔｙ頁）。

19　雑誌『文』（明治 21 年 12 月、22 年 1 月）、明治 21 年前後に「所有物の性質を論じて社会主義を評す」社会政策学会史料高野岩三郎「〈社会政策学会〉創立のころ」（社会政策学会 HP）を論じた元良勇次郎は、明治 8 年（1875 年）11 月、同志社英学校に入学し明治 12 年（1879 年）春まで同志社には 3 年余り在学しており、ラーネッド博

の講義を聴いた第一回卒業生に、海老名弾正、小崎弘道、金森通倫、浮田和民らおり、[20]彼等の後輩の徳富蘇峰もラーネッド博士に多く学んだ人である。

徳富蘇峰は明治9年10月14歳の時同志社英学校入学し、13年5月退学した。「京都同志社在学中、幾多の外人教師に接したれども、真に吾師と云ふを敢てする者は、只だラーネッド先生一人あるのみ」と尊敬の念やまない。「記者の対外思想は、最も多く同志社在学中に養はれた。露骨に云えば、当時外人教師などへは、毛嫌いする訳ではないが、成る可く近かぬこととしていた。但だ先生の教場には、心から愉快を以て出席した。記者をして史学、および経済学の興味を長養せしめたるもの、先生に負ふ所、決して鮮少ではない」、「記者がコブデン、ブライトの名を聞いたのも先生の教場であった。記者が『国民雑誌（ネイション）』を購読したるも、先生の手を藉りてのことだ」。[21]と学窓はなれて遠く隔たった時にも語っている。ラーネッド博士は12年ころより社会主義にかかわる講義をしていた。博士の授業に「心から愉快を以て出席」していた徳富蘇峰は言うまでもなく、浮田和民さらに元良勇次郎もラーネッド博士の授業を受けていたであろう。また、深井英五もラーネッド博士に学んでいる。

蘇峰門下を自任する深井英五（明治19年同志社入学、24年卒業）は、同志社の友人で国民新聞社員平田久の紹介で蘇峰と出会い、蘇峰は元良勇次郎に深井の生活と研究の両立を依頼してくれた。だが生活費の途が発見できないため、蘇峰は民友社から毎月一冊ずつ、外国新刊書の出版をきめた。そのうちの一冊が『新旧社会主義』である。ラーネッド博士に学んだ深井英五にとって社会主義は未知の思想ではなかった。[22]「教師の内、学問の上で私に深い感化を與へたのは、…経済学、政治学を教へて社会機構の根本問題に論及せらるラー

士の社会主義にかかわる講義を聴いている可能性がある。

[20] 住谷悦治『ラーネッド博士伝―人と思想』（未来社、1973年、264-265頁）。浮田和民は徳富蘇峰の同志社時代の友人である。前掲、『蘇峰自伝』（中央公論社、昭和10年、104－110頁）。

[21] 徳富猪一郎『人物偶録』民友社、昭和3年、63-65頁。

[22] 出原政雄、前掲、142頁。

ネット（Learned）先生」であり、[23]「経済学の大綱は既に同志社に於てラーネット先生から教えられて居た。それも上滑りの教科書的ではなく、簡単ながら相当徹底して居たと思ふ。即ち先生は主としてミルを祖述し、所謂正統派経済学の要領を教えふると同時に、計画経済の理念を紹介して、両者を対立せしめたのである」。[24] ちなみに、深井が学んだラーネッド博士の経済学はラーネッド著宮川恒輝訳『經濟新論』（1886（明治 19 ～ 20 年）年が出版されている。

このように、William Graham“SOCIALISM NEW AND OLD”という「社会主義」思想の本邦紹介を介在して、明治 20 年代当時に於ける小野塚と徳富蘇峰との思想的関心の通有性が見て取れる。

「社会主義批評両三片」前文には「僕一昨年暑中在郷の際英国グラハム氏著社会主義評論の数節を抄訳せる」とある。高校時代以来の社会問題への関心及び大学の授業の学びなどが、帝国大学入学の翌 25 年の夏休み 21 歳の時に故郷長岡で抄訳翻訳作業へと向かわせたのであろう。「数節を抄訳せる」とあるのは全 13 章 400 頁を超える著作のうち、「緒言」55 頁部分を 6000 字弱に抄訳したものである。緒言ⅠとⅡを「其一　経済的観察」、Ⅲを「其二倫理的観察」、Ⅳを「其Ⅲ（ママ）政治的観察」、ⅣとⅤを併せて「其五　結論」と抄訳した。

全体の構成は次のようになっている。INTRODUCTION　CHAPTER Ⅰ. The Forms of Socialism　CHAPTER Ⅱ. Socialism before the Nineteenth Century　CHAPTER Ⅲ. Modern　Socialism, from St. Simon to Karl Marx　CHAPTER Ⅳ. The New Socialism and its Argument　CHAPTER Ⅴ. In the Socialist State　CHAPTER Ⅵ. In the Socialist State (continued) Distribution of Wealth　CHAPTER Ⅶ. In the Socialist State (continued) The Suppression of Money and Markets　CHAPTER Ⅷ. In the Socialist State (concluded) Unproductive Labours. The church and the government　CHAPTER Ⅸ.

23　深井英五『回顧七十年』（岩波書店、昭和 16 年、18 頁）。
24　同上、第二十五章「経済学と哲学」、337 頁。

Practicable State Socialism(A) Legislative　CHAPTER Ⅹ. On some Proposed Remedies for Low Wages and Unemployed Labour　CHAPTER Ⅺ. An Eight Hour' Working Day　CHAPTER Ⅻ. Practicable State Socialism:(B) Administrative　CHAPTER ⅩⅢ. The Supposed Spontaneous Tendencies to Socialism

２「社会主義批評両三片」 小野塚　喜平次

左（下…沢目）は僕一昨年暑中在郷の際英国グラハム氏著社会主義評論の数節を抄訳せる者なり彼の議論深淵なりと云ふに非ず彼の着眼斬新なりと云ふに非ず然れども彼の見解は優に英国著者の特色たる常識に富む幾くは穏当着実と云ふを得んか今筐底より出して本誌の余白に充つ

其一　経済的観察

独断的放言の世は去れり科学的研究の時は来れり此に於てか社会主義は科学的なりと自称し経済学史学等により其論陣を堅むると同時に資本家個人主義論者も亦経済学を其味方と号し共に一歩を譲らざるの有様にして経済学の野は今や正に両軍交争の場たるの赴あり茲に豫め両論者に注意すべきことありそは他に非ず既定の法則と未定の仮定とを区別して引用すること之なり若し然らずして両者共に今日尚ほ疑問中にある仮定を根拠とし若くは陳腐に属せる旧説を本尊として互に相争はば恐らくは論戦終結を告くるの時なかるべし

個人主義論者の主張する彼所謂放任主義なるものは勿論或場合に於て政府の取るべき政策たるに相違なしと雖も之を以て直に千古不易の大法と為し干渉は徹頭徹尾不可なりと結論するが如きは是豈科学的研究法と呼ぶべけんや更に顧みて新社会主義論者を見るに彼等はリカード氏の価格論（貨物の価格は其生産と市場に運搬するとに費す労力に比例す）を少しく変化して同氏の最小額労銀論（労銀の平均額は労力者生活の最下程度に因て定る）と共に採用し以て資本家を攻撃するの基礎と為し資本は掠奪の結果なりと叫ぶが如し是果して正当なる論法なりと言ふを得るか知らずやリ氏の価格論は其非理なる証跡少しとせずして英国経済学者すら今や多くは之を是認せざることを然るに彼等

は啻に之を以て資本攻撃に充つるのみならず更に他の点に於て応用し労力の分量を計算するに普通労力の時間に依ることを以て分配法の基礎と定めたり是亦科学的研究法の許す所ならんや故に予輩は一方に於ては社会主義論者に対して其基礎たる価格論に十分批評を加え他方に於ては旧派経済学者政治家等に対して其主張する方案は果して確固たる科学の原理に依るものなるか或は単に其仮想億測より出るものなるかを質ささる可らず

盖し経済学は未だ有形諸科学の如く迅速なる発達なく今尚ほ鞏固なる位置に達せずして異論相衝突する問題少なしとせす或はミル氏の労銀基金説（労銀の平均額は労力者の総数を以て賃金に充つへき資本額を除したる者に等し）の如く謬見として已に廃棄されたるものあり或は需要供給の法則（貨物の需要變せずして其供給減すれば其價を増し又其供給増せば其價を減す）の如く古往近来常に真理として信せらるるもあり此際に当て此学を引証せんと欲する論者は先つ其引証せんとする法則の真価を見るの必要あるは固より多弁を俟たさるなり而して又社会主義と個人主義との争を決し資本と労力との紛議を解かんには豫め労銀利子価格市價等の因て定まる法則を知らさる可らす之を知るには資本家労力者の両社会中には只に競争あるのみならすして共に各多少連合あるの事実を認めざるべからす今其場合を列挙せば左の如し

一　資本家社会中にも労力者社会中にも各競争行はるる場合

二　資本家社会中にも労力者社会中にも各連合行はるる場合

三　労力者社会中にのみ連合行はるる場合

四　資本家社会中にのみ連合行はるる場合

五　両社会中に各一部分の連合行はるる場合

以上五者中第三は最普通に行はれ第四之に次き第五は追々増加するの風あり要するに天下の大勢は両社会中に於て各益々連合を盛ならしむるの傾向を示し労銀問題は愈複雑困難となり行く有様にして賃金は時に一の生産事業に関係する総雇主と総被雇人との維持力（即貯蓄金）の比例によりて制せらるるのことあり時に其争一地方に限り其地方に於ける両者維持力の如何に因て定ることあり而して概言すれば雇主は維持力に富むを以て勝利を占むるの好地位

に立つこと多けれども輿論にして一度一方を正とし其大勢力を傾けて之を助くるときは他方は之に歩を譲るを例とし輿論を若し争を決すること能はされは両者間に仲裁人出て来り仲裁尚ほ効を奏すること能はさるに至れば政府の干渉は誠に必要にして避くべからさる者なり然りと雖も如何なる政府の干渉も到底長く有効に継続し能はさるの一事あり即ち労銀を増さんとして経済社会普通の利子歩合を減する事是なり

労銀問題は以上に略述せるか如き有様なるを以て競争を基礎と仮定して立論したる旧経済学を以て之を解くは至難の業にして実際上貨物及び勤労の價は生産入費に依りて決するよりは寧ろ専占に依りて定まる場合漸次に増加するの勢なり鉄道に於ける運賃の如きは其適例と言フ可きなり」（『長岡郷友会雑誌』十七号　明治二十七年４月）

「社会主義批評両三片」　小野塚喜平次

其二　倫理的観察

　社会主義は前陳の如く経済上の問題なりと雖とも又た實に大なる倫理上の問題を含蓄す看よ正理公道は社会主義論者の常に口にする所にあらずや彼等は現社会の組織を以て徹頭徹尾不正非道なりとし之を矯正せんことを第一の目的とせり而して現時制度には次点夥しくして富の分配不公平なることはミル、ケアンス、シヂウェク等を始め多数の経済学者が等しく痛嘆する所なるか故に吾人の前に横はる疑問は社会主義は今日の人性に於て果して実行し得へきか又実行せば正理公道に適ふこと果して現社会に勝るかの二点にあり

抑富の分配法に付て社会主義中に二説あり其一説は生産高を各人に均分することを主張し其二説は生産高を各人に其仕事に応じて分配することを主張す第一説は一見正しきに似たりと雖とも其真に然るや否やは社会主義の諸派が互に争論し先にはサンシモン派后には近世社会主義論者の幾分が全然反対する所にして其絶対的正否の論は暫く措くも均一分配の結果は各人皆等しく貧困窮乏に陥らさるや誠に疑はしき次第なり又第二説の正否に付ても議論一定せす若し之を正しとするも異種の労力を比較して同一単位に帰することは到

底人力の及ぶ所にあらざるが故に実行し得へからさるは明白なりと雖とも近来頗る勢力ある説なれは固より識者の考究を累すの價ある者なり

社会主義は更に又「人は道徳上に於て進歩し得る者なりや否や」の大疑問に関係すること密接なり何となれは社会主義は若し行はるるとするも人類徳性の改良発達を俟て后始て能く行はるる者なればなりスペンサー、ベーンの如き有名なる心理学者は吾人に告げて曰く主我心は到底脱却し能はさる人類固有の天性なりと若し此主我心にして一般に減するの望なくんば社会主義は実行の望なきなり主我心は過去に於て果して減したるか曰く然り主我心は減したり主他心は増したり然れとも其増加の度極めて少にして殆ど差異を弁するを得す近代に至て正義の観念は発揮されたり博愛の思想は普及されたり殊に労働者に対する慈悲心は著しく進捗されたり心理学者も人性に主他愛人の基礎あるを認めたり是皆徳性進歩の徴候にして喜ふへきの現象なりと雖とも試に身を翻して視線を楯の多面に投せよ如何に貨財が主我心を鼓舞する大誘惑物なるか如何に此大誘惑物が近来驚くへき増加を為したるかを知らば主我心は仮令其分量に於て増すことなしとするも之を発表するの機会が如何に増加したるかは三尺の童子も容易に了解する所ならん四十年前に文豪カーライルが排斥したる拝金主義は爾来益盛にして今や滔々汨を一瀉千里の勢を以て満天下に瀰漫横流せんとし金即権の三字は金科玉條として尊奉せられ金の多寡は人物を評するの標準となり驕奢貧吝腐敗詐欺抑圧等の悪徳は時々刻々不平怨恨抵抗絶望発狂等の種子を蒔きつつあるなり吾人が全局を通観打算して果して徳性の進歩ありたるか否やを判するに苦むも亦宜ならずや

抑科学技術の進歩即有形的文化の発達は必す無形道徳上の進歩を伴ふものなりやは実に文明史上の再難問にして諸大家の議論紛々交錯して統一せさる所なり進化論は然りと答ふるも社会主義論者が直に之を以て援兵を得たりと信するは大なる誤謬なり盖し進化論は徳義の漸進を是認するも其所謂進歩の度たるや極めて緩にして社会主義の夢想を現実にするの程度に達せんには尚幾千百年の長年月を要すと論すれはなり此に於てか社会主義論者中急激の徒は自然の進化の遅々たるに堪えず一挙功を奏せんと欲し革命を主張するに至れ

り此輩の言に曰く先つ境遇を変せよ人性は其新境遇に適応せんか為め従て變すへしと然れとも是れ信すへきの説に非ず必すや其新社会に不満なるの徒は相率いて更に革命を企てん革命復革命其勢底止する所を知らす徒らに財を糜し或は時に血を流すに帰せんのみ豈其始を慎まさる可んや
斯の如く社会主義を一朝に実行するは到底望むへからさるも而かも現時の制度に大改良を加ひ正義公道をして一層行はれしめ理想世界に一歩を近かしむるは敢て雲を攀ち天に上るが如き空想にあらさるへし如何なる人も多少正を好み義を愛するの念あらさるはなく如何なる社会も幾分か道徳の拘束なくんは其団体を維持する能はす人類已に此念あり吾人何すれぞ失望するを用いん宜しく協同戮力以て政治に法律に凡て万般の事業に着々改良を加へ以て強者の抑圧を妨げ弱者の重荷を除き国家をして一階級の専有たらしめず最大多数の最大幸福を標準として眞正の自由政治を行ふへきなり」（『長岡郷友会雑誌』第十八号　明治二十七年四月）

「社会主義批評両三片」　小野塚喜平次

其三

政治的観察

社会改良は固より為し能はさるものに非すと雖とも又決して一挙手一投足の労を以て容易に遂け得可きに非す故に教育宗教等の力を借り漸々精神的進歩を促すの切要なるは何人も首肯する所なる可し去れと社会主義の問題は寧ろ政治上に関すること多きなり夫れ教育宗教の勢力は深淵偉大なりと雖とも未た直接に其意志を発表し之を強行すること能はす政治に至てや之に異なり直に其巨腕を延べて制度法律を作為変更廃止し以て其意の如く階級間の関係を変し不公平を矯め貧を和け強を挫くの権力を有せり而して脆弱なる労働者を保護し無頓着なる雇主を制限せんとて諸国政府か此権力を使用することの増加したるは近来四十年間に於ける著しき事実なり抑も政府は貧弱なる階級を助くるの権力有するのみならす又実に之を助くるの義務を有するものにして単に正しく法律を行ふのみならす正しき法律を作らさるへからす契約を強行

せしむるは政府の義務なると同時に実際上自由契約にあらさるものに干渉するも亦其義務にして専売者に干渉するも政府の正当なる事業の一なり然りと雖とも政府の其権力を使用するや必す経済上の法則に従ひ社会上の進化に伴はさるへからす故に政治家にして其正に取るへき方針を知らんと欲せは豫め経済上の法則と社会上の進化とを詳にすること肝要なり之を詳にせすして漫然政治を試むるの徒は共に談するに足らさるなり志士須く学術の進歩と社会の発達とに刮目注意すへし知るや否や彼社会主義の方案は悉く実行し難しとするも其精神は開明諸国に於て将来大影響を政治上に与ふるの運命を有することを其徴候は種々にして政治家も已に其然るを自覚し社会問題の乱麻を解く快剣は大旱の雲霓の如く一般に渇望せらる嗚呼誰か快剣を揮て乱麻を絶つものそ志あるものは須らく社会問題の性質社会主義の法案を熟考すへきなり
社会主義は近時独仏米等に於て益々盛なるも英国に於ては未た然らず彼の同業組合の如き組合人百万を以て数へ連合して労働者の利益を計るも彼等は政府の干渉を請求せず土地資本の固有を主張せさるを以て社会主義論者を以て目し難きなり然れとも下等労働者にして社会主義の傾向あるもの夥しく而して近来国会議員選挙権の拡張により彼等中有権者を増加したれば議会に於て社会主義的方案の顕はるるも遠きに非さるへし要するに久しく屈したるものは伸びんことを求め圧縮の極は破壊を招く勢の切迫するに先んじて労働者を救護するは識者の任なりブルンチリーの所謂政治家の技は一方には有識者をして浮浪の徒に堕落せしめず他方には浮浪の徒をして有識者たらしむるにありとは善く穿ちたる言にして政治家の能事蓋し此に終らん

其五（ママ）　結論

社会主義は固より労働者の位地を高めんことを主張すれとも社会主義を以て直に貧人問題なりとなすは其見解狭隘に失するものと云ふへしシモン等の近世社会主義を唱導せるや貧者の有様を改良するは其目的の一なりしも之其終局の目的なる労働及び労働の結果分配を一層正大公明の基礎上に改築せんとの中に包含せられたり其計画は各人をして其得意の事業に就かしめ其事業に

応して報酬を異にするにありき然れとも近来独乙其他に流行するマルクス派の社会主義を以て主に労力者問題となし社会進化の潮流如何を省みすして単に各人均一報酬を主張し如何に一般の趨勢か才能の不等に基きたるシモン流儀の社会主義に向て歩を転しつつあるかの現象を限外に放つの風あり彼等の均一主義の到底行れざるべきは中等以上の社会は勿論労力社中高給を受くる者は皆之に反対すべきを見ても明なり而して報酬不平均主義は若し教育制度を変革し貧人の子弟も其脳力に応して高等教育を受くるの便宜を有せしめは即之各人に同一に昇進の機会を与ふるものなれは各人は社会に出てて才能の不等により報酬の不等を来すも決して不正にあらすして却て真正の平等主義に適ふものとこそ云ふべけれ彼の均一主義の如きは其正なるや否やは扨て置き幾千年の後はいざ知らず到底今日の主我的人性に適せざるものなり之に反してシモン派は主我心を認め才能の不等を認め能者を上にし不能者を下にするものなれは実行の望空しからす現にナポレオン一世の治下に於ては殊に其軍隊中に於ては此流の社会主義を実行したるの観ありて苟も才能を有するものは其身分如何を問はすして其適当なる高地位に達するを得たり是実に当時仏軍が連戦連勝破竹の勢を以て欧州の中原を横行したる主なる原因なり然りと雖ともシモン派の主義も直に全然実行するは不可なり先つ現在社会組織の欠点を補はん為め其一部を施行し徐ろに歩を進むべし突然生産事業を悉く政府の支配に屡せしめ一私人の企業を禁するか如きは決して得策にあらず殊にシモン派の主張する財産相続禁止論の如きは人性に反すること報酬均一論に譲らさるなり故に今日に於て吾人の行ふへき事項は共同生産小地主の増加工場の制限労働時限の制限遺産相続税無月謝教育専占の恐ある生産事業を政府の掌中に握ること等にして徒に奇説を好み急変を望み十分の心算なくし一世を挙げ危険なる試験に供するが如きは真に生民を愛し進歩を希ふ者の敢て為すべき所にあらさるなり」(「長岡郷友会雑誌」第二十一号)

矢部貞治は「同雑誌の明治二十七年四月（第一七号）と、同八月（第二一号）には、「社会主義批判両三片」と題し、資本主義と社会主義とを比較し、社会

主義の意義を適当に評価したグラハムの『社会主義評論』から、数節を抄訳したものを載せている。わが国でこの時代すでに社会主義に、積極的な関心を持っていたことが、注目されるのみでなく、グラハムにつき、「彼ノ議論深遠ナリト云フニ非ズ、彼ノ着眼嶄新ナリト云フニ非ズ、然レドモ彼ノ見解ハ、優ニ英国著者ノ特色タル常識ニ富ム、幾クハ穏当着実ト云フヲ得ンカ」といっているのは、後にジェームス・ブライスの『近代民主政治論』（『衆民政』）に傾倒した小野塚の、実証主義的学風を予兆するものとしても興味がある」と評している[25]。抄訳掲載は２回ではなく３回であり、「社会主義批評両三片」を「社会主義批判両三片」との誤記はあるが妥当な批評である。

1890（明治 23）年出版の本書を小野塚は２年後帝国大学入学の年に読んでおり、その夏郷里長岡で読み作成した。発表は明治 26 年の「社会問題研究会」投稿がさきであるが、この抄訳で学んだことが「社会問題研究会」投稿につながり、内在的な関係の存在を示している。後に示すように、帰朝後の東京帝国大学法科大学教授金井延の大学での講義や著作・講演活動を考慮すると、小野塚は金井の影響を受け本書に出会う機会を得たのであろう。

社会問題と社会主義論について、小野塚政治学の初期意識および金井延の主張と関連する抄訳部分と、小野塚政治学の基本的部分に関係する特徴的な論点は４点ある。

１「其一　経済的観察」の冒頭が小野塚の思考的原型を示している。原文はこのような断定的表現で始まってはいない。試訳では「私は可能な限り、全体を通して科学的な議論を目指してきた。つまり、経済学、道徳学、政治学の観点から社会主義を考察しようとしたのであり、これがこのテーマの核心に迫る唯一の取り扱い方法であると考えたからである」となる。これを、小野塚は「独断的放言の世は去れり科学的研究の時は来れり」と大胆に断言的な表現を用い、学問に於ける「科学的研究」の重要性とその到来を高らかに述べている。ここには J.S. Mill“Representative Government”とともに、「生涯を通じ

25　前掲、南原繁・蠟山政道・矢部貞治著『小野塚喜平次』著、36 頁。

最も感銘を与えられた書物は、高等学校時代に読んだ左の二書で、その読了当時は、誠に広々とした新天地に出たような気持になった」として、H.Spencer “Education” を挙げており[26]、スペンサー『教育論』の影響が現われている。『教育論』において、スペンサーは「最も価値ある知識は何かという最初の問いに対する答えは、終始一貫「科学」である。これこそ全問題に対する回答である。・・・市民の行為の正しい規正に必要な過去現在の国民生活の説明、この説明にとって不可欠の鍵、それも「科学」である」[27]と知識と教育に「科学」の役割を高らかに論じている。明治29年の「政治学の系統」では政治学における「科学」的思考の重要性を前提して論じた。

「第７　政治学説沿革大要」で「従来政治上の学説として世上に知られたる者は、今日の科学的時代より批評せば多くは真偽混交して学説の名に價せさるの感なきにしも非ず、・・・彼の「マキアベリー」――種々の批難を蒙りたるにも関せず、政治学をして一方に於ては神学より、他方に於ては法学より、分離したるの功は、何人も彼に対して争ふこと能はざる」。[28]

２「其二　倫理的観察」には社会主義の急激思考、革命志向を批判し、革命が社会混乱を助長して止まなず、究極には流血事態の出現を危惧している。

「社会主義論者中急激の徒は自然の進化の遅々たるに堪えず一挙功を奏せんと欲し革命を主張するに至れり此輩の言に曰く先つ境遇を変せよ人性は其新境遇に適応せんか為め従て變すへしと然れとも是れ信すへきの説に非ず必すや其新社会に不満なるの徒は相率いて更に革命を企てん革命復革命其勢底止する所を知らす徒らに財を糜し或は時に血を流すに帰せんのみ豈其始を慎まさる可んや」

一気に社会主義を実現することの困難なるがゆえに着実な改良を加え、強者

26　同上、28頁。

27　スペンサー「知識の価値―教育論第一部」（清水幾太郎責任編集、世界の名著『コント・スペンサー』、中央公論社、1980年、485頁）。

28　小野塚喜平次「政治学の系統」（『国家学会雑誌』、明治29年、10巻115号、1006-1007）。

の抑圧を防ぎ弱者を救済することにより正義の実現をもとめ「最大多数の最大幸福を標準として真正の自由政事を行ふへきなり」とベンサムの言葉を引用した。

３　「其三　政治的観察」でブルンチリーの言葉の訳語「有識者」について

　小野塚は「ブルンチリーの所謂政治家の技は一方には有識者をして浮浪の徒に堕落せしめず他方には浮浪の徒をして有識者たらしむるにありとは善く穿ちたる言にして政治家の能事蓋し此に終らん」と訳している。だが、ブルンチュリーは「有識者」とまで言ってない。筆者の試訳では、

「政治家の真の芸術は」、政治哲学に関するドイツのブルンチリーが正しく述べているように、「一方では、組織化された労働階級のメンバーが組織化されていないプロレタリアートに陥るのを防ごうとすることにあり、他方では、できるだけ多くの人々がプロレタリアートから、比較的安定した生計を得ることができる組織化された階級に上昇するのを助けること」となる。組織労働者が未組織の経済的弱者へ低下することを防ぎ、他方未組織の経済的弱者である労働者の経済的上昇を求めるのである。ここに小野塚の「有識者」指向、経済的優越者すなわち「有識者」という知的偏向ないし知的優越性が見て取れる。

４　結語の最後で、「徒に奇説を好み急変を望み十分の心算なくし一世を挙げ危険なる試験に供するが如きは真に生民を愛し進歩を希ふ者の敢て為すべき所にあらさるなり」とある。この言葉はグラハムの原文にはなく小野塚自身の見解である。革命論などの急激な社会変化を否定する小野塚の社会的立場が明確に表れている。

３　「識者何ぞ速に社会問題研究会を組織せざる」小野塚喜平次

　左（下…沢目）の短編は本年二月上旬予が日本国民両新聞社に寄せて没書の栄を辱ふせしものなり声聞くなく文筆なき予又た何をか言はん只余は日本の社会殊に其先導者を以て自ら任ずる新聞社会が社会問題に対して今日の如く冷淡に済し得るの日の意外に速に過ぎ去らんことを恐るるものなり今本誌の余白を借り郷友会諸君の一覧に供す

苟も少しく世界の大勢に注目するものは必すや知らん邦家の安寧民人の調和を危ふする二個の趨勢の現に存在することを一は即ち各国競ふて勢力の拡張を勉むるより生する国際間の衝突にして他は即ち産業の発達分配の不平均より来る貧富の軋轢是なり此二者は方今の二大難問にして其解釈如何は直に邦家民人の安危禍福に影響するのみならす又実に人類社会の文明進歩の歴史に大関係を有するものなり東洋の振起宇内の化育を以て自ら任ずる日本国民たるもの寧そ振て此難問を研究する所なかるべけんや我国の識者玆に見るあり曩に東邦協会を組織して着々東南洋情況の調査に従事せらる盖し我国民の対外政策に資せんとするものにして前記難問の一に解釈を試むるに外ならざるへし是れ吾人の大に喜ふ所なり独り怪しむ是と両翼両輪の関係ある他の難問即ち世の所謂社会問題なるものに至ては未だ其研究を企つる会合の起らさることを誰か言ふ今日に於て社会問題を云々するは漫に事を好むものなりと人口の増加器械的産業の発達平等思想の普及彼れが如く迅速なる我国に於て社会問題の早晩発生するは到底避くへからさる結果なり況や都鄙労働者の憫むへき惨状は錦衣玉食寒苦の何物たるを弁ぜざる貴公子の状態に反映して已に多少世人の注意を喚起し同盟罷工の如きも已其流行の端緒を開きたるに非すや嗚呼識者よ卿等は労働者が囂々不平を訴へ扇動者が機に投し巧に危激の説を弄するの日を竢て而め後ち始て之に応ずるの策を講ぜんと欲するか之れ豈遠慮あり義侠心ある卿等の為すへき所ならんや宜く速に朝野を分たず党派宗教の如何を論せす学者と実務家との区別を問はず苟も憂国愛民の士は相団結して社会問題研究会を組織し慈仁なる心情と冷静なる頭脳とを以て精細に労働者の実状を探り之に対する各種の方針を学術的に講究して公平なる判定を下すべきなり是れ啻に卿等か日本国民に対する責任なるのみならす抑も又た人情優美風俗淳厚階級調和を以て其特性となし来れる日本国民が世界に対して負ふ所の最大義務なり徒に尚早論を唱ひ荏苒歳月を空過して悔と辱とを将来に残すこと勿れ見よ時勢風雲の変遷方に甚だ急なり陰雨の至る其何の時なるを必すべからす識者何ぞ速に牖戸を綢繆せざる嗚呼何ぞ速に牖戸を綢繆せざる」（『長岡郷友会雑誌』第五号　明治二十六年四月）

矢部貞治は「これは彼が日本、国民両新聞に投稿し、「没書ノ栄ヲ辱クセシモノ」だそうで、そのことは「声聞ナク文筆ナキ予又タ何ヲカ云ハン」と、あきらめているが、ただ新聞が社会問題に冷淡なのを慨して、ここに載せるという説明がついている。彼はこの中で、国際間の衝突と国内での貧富の軋轢とは、方今の二大問題だと指摘し、労働者の惨状を説いて、社会問題の重大性を力論している」。[29] 矢部が指摘するように、小野塚が早い時期から社会問題に関心を持っていることを示す投書である。その契機になっているのが幕府譜代長岡藩に生まれた幼少期に始まる小野塚の政治への関心である。小野塚は後年、政治科選択の理由を次のように述べている。

「元来私自身が何故政治に興味を持つに至ったかというに、幼少の時からの環境と、自分に賦与せられた性質の結果ともいうべく、それが以後の私の生涯を左右するに至ったものと思われます。私の郷里は越後の長岡で、その頃越後地方の心ある者は、明治政府の専政的傾向と薩長万能の弊に対して、すこぶる不平でありました。私は家庭において、又中学時代の交友において、自然左様の雰囲気の中に、少年時代を送ったのでありまして、中学及び高等学校時代好んで読んだ書物は、政治評論並びに政治小説、それも慷慨的な愛国、民権、自由に関するものが、多かったのであります（強者の横暴に反抗する気分から、当時の民権論者は多く愛国論者でありました)。…（中略）…もっとも小学時代より中学時代に、放課後数年間毎日通学した漢学塾の、高僧の仏教的感化の影響もあり、功利的な立身出世主義に超然としようという気分は、幼少時代より持っていました。その上父は、学問は帝国大学の方が一層程度が高いようだから、その方に入学するよう申しましたので、私もその気になり、一高に入り、ついに法科大学政治科に籍を置くに至ったのでありますが、内心には野人的な、非官僚的な、進歩的な思想を持っておりました」。[30]

29　前掲、南原繁・蠟山政道・矢部貞治著『小野塚喜平次』、36 頁。

30　「何故に政治科を選んだか」昭和十二年七月一日語る。東京帝国大学法学部『緑会雑誌』第九号。南原繁・蠟山政道・矢部貞治著『小野塚喜平次』（岩波書店、昭和 38 年、24－25 頁）。

陸羯南の『日本』と徳富蘇峰の『国民新聞』の読者世界の人であった小野塚は、当然徳富蘇峰の『国民之友』の読者でもあったであろう[31]。ある意味での明治前期の政治青年の気質を示している。

「東邦協会」は明治24年5月結成され、会員募集広告が出された。小野塚は陸羯南の『日本』に掲載された記事で知ったものであろう。[32]東邦協会の設立目的は、東洋において指導国としての日本が西洋諸国と対等な関係を保つための放針作成であった。「西洋諸邦が無量の工作物の販路を求めて植民地獲得」をおこなって東洋にまで進出している。日本と支那がその対応にあったている。それゆえに、現在は「姑息の策に安し域内相ひ閲くの秋にあらす」「この時に当り東洋の先進を以て自任する日本帝国は近隣諸邦の近状を詳かにして実力を外部に張り、以て泰西諸邦と均衡を東洋に保つの計を構せさる可らす」という認識のもとで設立された。西欧列強による東洋への植民地化に対する危機感を小野塚も共有していたことが認められる。

理事には会頭副島種臣、副会頭近衛篤麿ほか、評議員には谷干城、大井憲太郎、陸実、志賀重昂、三宅雄二郎、河野広中、金子堅太郎、尾崎行雄などの名前がある。[33]また会員には元総理大臣伊藤博文、現職総理大臣の松方正義のほか、井上哲二郎、原敬、田口卯吉、高田早苗、徳富蘇峰、板垣退助、星亨、中江兆民、尾崎行雄、岡倉覚三、矢野文雄、朝比奈知泉、杉浦重剛、鳥尾小弥太ら303名[34]が名前をつらねていた。とくに谷干城、近衛篤麿、鳥尾小弥太は新聞『日本』の資金提供者である。会員に志賀重昂、井上哲二郎らの名前が見られるのは、当時の小野塚の読書傾向とも一致する。[35]小野塚にとっては

31　明治28年の小野塚の記録ではあるが、徳富蘇峰の『静思余録』を所持している。同上、『小野塚喜平次』、48頁。

32　『近代日本総合年表第三版』（岩波書店、1991年）。

33　「東邦協会設置の趣旨」（国会図書館デジタル、「東邦協会々報.(3)明治24年4月付の記事」、2～4コマ、）

34　「会員姓名」（国会図書館デジタル『東邦協会報告』第3、東邦協会、8～9コマ）。

35　小野塚が一高入学（明治20年）の少し前から作成したと推定される帳面「慮後摘録」（副題「佳文名句集」）の第二巻の「名家傑作詩集」に西郷隆盛、木戸孝允、藤田東湖、勝海舟などとともに井上哲二郎（哲次郎の誤りであろう）、志賀重昂の詩が収

当時これらの著述家の評論は身近なものではなかったろうか。小野塚は東邦協会設立とほぼ同じころ、第一高等中学校在学中に故郷長岡の雑誌『交進雑誌』第一号に「世界現時之大勢を論して愛国心の必要を及ぶ」を発表しており、東邦協会の主張と思想的同質性を示している。ちなみに東邦協会には徳富蘇峰も会員になっている。蘇峰は明治26年の秋から対外硬派の運動をおこし従来とは逆に軟弱外交批判の時期、12月には前年の講演および『国民之友』発表の講演筆記をもとに『吉田松陰』を出版しており[36]、蘇峰の思想的変化を人間関係からも示している。

小野塚の第二の関心は社会問題の出現であり、社会の「冷淡」な対応であった。小野塚は陸羯南の『日本』や徳富蘇峰の『国民新聞』が対外政策への関心の深さに対して、もう一つの重要課題と考える国内における社会問題、貧困問題、労働問題、同盟罷工問題（ちなみにこの年1月には天満紡績職工数百人が労務管理に反対してストが起きている）について、「余は日本の社会殊に其先導者を以て自ら任ずる新聞社会が社会問題に対して今日の如く冷淡に済し得る」という。『国民新聞』社長徳富蘇峰は明治20年に『国民之友』を創刊し第10号からは当時として異例の1万部に達し、当時の青年層を中心に大きな影響をあたえた。蘇峰はその勢いに乗って明治23年『国民新聞』を発刊した。『日本』や『国民新聞』の読者と考えられる小野塚であり、『国民之友』の読者と考えるのは無理のないことであろう。

「中学及び高等学校時代好んで読んだ書物は、政治評論並びに政治小説、それも慷慨的な愛国、民権、自由に関するものが、多かった」[37]小野塚はおそらく学問的知見のある人々を含めた社会問題研究会の設立を求めたのである。

小野塚が言うように新聞社会が社会問題に冷淡な事実はあったのだろうか、徳富蘇峰の『国民之友』の論説を中心に見よう。表1は明治25年に発表された社会問題と労働問題に関する『国民之友』と『国民新聞』のおもな論説項目

録されている。前掲『小野塚喜平次』27頁。

36　植手通有『徳富蘇峰論』（『植手通有２』あっぷる出版社、2015年、138頁）。

37　前掲『小野塚喜平次』（岩波書店、昭和38年、24頁）。

表１

明治 25 年	『国民之友』『国民新聞』記事項目
6 月	「社会立法の時代」(『国民之友』157 号）職工条例問題を論じ、職工擁護の立場示す
7 月 9 日	社説「農民同盟」(『国民新聞』) も同様の傾向
7 月 27 日	「政治上に於ける社会主義」(『国民新聞』)
8 月 4 日	東京深川左官職 100 人余壁職業組合に賃上げを要求して同盟罷業、成功
8 月	社説「社会問題の新潮」(『国民之友』169 号)、「新たに社会問題研究会を組織すべき」と論ず、　　煉瓦積職工と工事請負人との間にも同様争議起り、
10 月	「社会問題の新潮」(『国民之友』第 169 号)
10 月	「同盟罷工至る処に起る」(『国民之友』第 170 号) ()
10 月 28 日	「聯合追放」(『国民新聞』)
11 月	「大同盟罷工は何を教ゆるか」(『国民之友』171 号)
11 月 11 日	松原岩五郎「最暗黒の東京」(『国民新聞』) 連載始まる
11 月	ボアソナード「日本ニ於ケル労働問題」(『国民之友』第 171 号)、同ボアソナード「日本ニ於ケル労働問題」(『法学協会雑誌』11 月号)
11 月	「社会問題の反響」(『国民之友』第 172 号)
12 月 8 日	社説「労働問題」(『国民新聞』)、金井延「ボアソナード氏の経済論を評す」(『法学協会雑誌』11 月号、ボアソナードとの論争)
12 月 25 日	社説「工場の立法」(『国民新聞』)
明治 26 年	金井延「日本に於ける労働問題」(『国民之友』第 178・180 号、1・2 月)、同金井延「ボアソナード氏の経済論を表す」(『法学協会雑誌』1・2 月号)

である。

表１を見ると、明治 25 年については、『国民之友』が社会問題に「冷淡」とは言えないであろう。創刊当時からの動向を詳細に論じた佐々木敏二氏によると、創刊から 1889（明治 22）年までの『国民の友』は欧米の労使問題、社会党・虚無党の問題に言及し、わが国の貧困の問題に触れている。しかしあくまで経済上の平民主義という姿勢の中の一部分であり、消極的に触れられているに過ぎないという。この消極的姿勢は翌年に一新し積極的に社説で社会問題を論ずるようになった。5 月以降、酒井雄三郎のパリからの通信を掲載し、社会問題、社会主義の啓蒙誌としての性格を持つようになる。『国民之友』が貧民問題・労働者問題を正面から取り上げるようになったのは、1890（明治 23）年 5 月 第 81 号からである。職工の同盟罷工要求勝利を取り上げた論説で、「新たに社会問題研究会を組織すべし」と論じたのは、『国民之友』第 169 号社説「社会問題の新潮」（明治 25 年 10 月）のことである。[38] つまり、「社会問題研究会」

の設立を小野塚投書の前年10月に『国民之友』も論じているのである。

小野塚による「新聞社会が社会問題に対して今日の如く冷淡」という判断とは明らかに異なる「新聞社会」の状況である。とするならば、小野塚はなぜそのように考えたのか、社会問題にかかわる記事の多寡の問題ではなく、「新聞社会が社会問題に対して今日の如く」論じているその内容への違和感ではなかったのではないか。投書では社会問題が必然的に発生する問題であり、労働者の不満に始まり結果的に社会不安の発生後に対策を講じることへの無能ぶりを露骨批判する。さらに同盟罷工を否定し「危激の説を弄するの日を竢て而め後ち始て之に応ずるの策を講ぜんと欲するか」と、社会問題・同盟罷工発生の後に対策を講じることの無能無策ぶりを批判する。ここで留意すべきはなによりも、「社会問題の早晩発生するは到底避くへからさる結果」という状況判断は留学で学んだ金井延のものでもあった。

小野塚喜平次と金井延の関連年表をみても、金井延が積極的に『国民之友』等に社会問題を発表していることがあきらかであり、また小野塚と金井延との何らかの人間的関係をうかがわせるものがある。

明治21年以降、帝国大学法科大学において社会問題・社会主義への関心がひろがった。

「大学の連中が社会主義に関心をもつようになったのは和田垣〔謙三〕教授の存在を第一に挙ぐべきで」あり、同教授は明治21年3月の『国家学会雑誌』に「講壇社会党」を発表し、同年の11月大学通俗講演会において「社会主義」と題する講演をし、翌年1月・2月の『東洋学芸雑誌』に収録された。その前後、岡田良十氏「社会主義の正否」、元良勇次郎[39]氏「所有物の性質を論じて社会主義を評す」などがあった。和田垣教授はドイツ流の講壇社会主義を講

38　「『国民之友』における社会問題論」（『キリスト教社会問題研究）18号、1971年3月、149頁、152頁）。佐々木敏二氏は民友社と「社会問題・社会主義」についての先駆的ですぐれた研究者と評されている。出原政雄「民友社の社会主義論」（西田毅、和田守、山田博光、北野昭彦編『民友社とその時代』（ミネルヴァ書房、2003年、12月）。

39　徳富蘇峰の同志社時代の友人である。『蘇峰自伝』（中央公論社、昭和10年、104－110頁）。

表２（小野塚喜平次・金井延関連年表）

明治	小野塚喜平次関連	金井延関連
20	9 月第一高等中学校第一部入学同級に高野岩三郎・矢作栄蔵ら	
21		21 年、3 月和田垣謙三「講壇社会党」(『国家学会雑誌』) 11 月和田垣謙三講演「社会主義」(翌年 1・2 月『東洋学芸雑誌』に収録) 9月 《国民之友》社説〈労働者の声〉11 月 大学通俗講演会で和田垣謙三〈社会主義〉講演(翌年、1.2 月《東洋学芸雑誌》に掲載。この講演前後に岡田良十〈社会主義の正否〉、元良勇次郎〈所有物の性質を論じて社会主義を評す〉などあり
22	Graham"Socialism NEW and OLD"	
23		11 月 13 日欧州留学より神戸に着く、12 月「国家学会」にて「現今の社会的問題」を講演
24	4 月筆名北越矯協々生で「世界現時の大勢を論して愛国心の必要を及ぶ」(『交進雑誌』) 発表、12月 小野塚喜平次は金井延「スタイン先生の一周忌」『六合雑誌』講演を聞く、	1・2・3月「現今の社会問題」(『国家学会雑誌』に発表)、4月「方今の急務は農を勧むるにあらずして工商を勧むるに在り」(『東京商業雑誌』)、5月「経済学の近況と講壇社会党」(『東洋学芸雑誌』)、「政務官と事務官の別を論じ併せて国家学に志す諸士に望む所あり」、12月「スタイン先生の一周忌」(『六合雑誌』) 12 月、「労働時間の制限」(『竜門雑誌』) 第 44 号乃至 47 号
25	小野塚は2月発行の金井延講演「政治経済学生の前途」『一高校友会雑誌』を聴いたと推定される、7 月小野塚喜平次第一高等中学校卒業、夏休みに Graham"Socialism NEW and OLD" を読み抄訳する、9 月帝国大学法科大学政治学科入学、長岡郷友会雑誌編輯人となる、12 月「シカゴ」(『長岡郷友会雑誌』第1号),	2月「政治経済学生の前途」『一高校友会雑誌』、「国家経済上の急務」(『国民之友』155 号)、「婦女の労働」『理財新法』9・10 月、「婦人と経済」『六合雑誌』10 月、11 月 ボアソナード「日本ニ於ケル労働問題」(『法学協会雑誌』)、12 月・翌年 1 月「ボアソナード氏の経済論を評す」(『法学協会雑誌』25 年 12 月・26 年 1 月)、
26	2 月「長岡市街何ぞ統一せざる」((『長岡郷友会雑誌』第 2 号)、4 月『識者何ぞ速に社会問題研究会を組織せざる」(『長岡郷友会雑誌』、5 号)、10 月「将来の男子及ひ女子」(『長岡郷友会雑誌』第11号)、	2 月 「婦人と経済 続」『六合雑誌』、1 月「日本に於ける労働問題」(『国民之友』178・184 号)、「貧民存在の原因」『国民之友』第 193 号、「貧民救済策」(『国民之友』205 号)、「社会問題の研究」(『六合雑誌』8 月号)、金井延『社会問題』『専修学校講義筆記』、
27	4・5・8 月「社会主義両三片」(『長岡郷友会雑誌』17・18・21 号)、5 月森山信規訳グラハム『新旧社会主義』(博文館)、小野塚喜平次は『長岡郷友会雑誌』24 号、11 月発行で編輯人終える	27 年 5 月森山信規訳グラハム『新旧社会主義』（博文館）、金井延『社会問題 270 頁』《専修学校講義筆記》、
28	7 月帝国大学法科大学政治学科卒業、9 月大学院に入り政治学を専攻、	1 月「政治学上の一問題」(『法学協会雑誌』)
29	2 月桑田熊蔵に代わり国家学会雑誌編纂委員になる、欧米新刊紹介を担当、9 月「政治学の系統」(『国家学会雑誌』)	

義したと記憶している。同様に大学の連中が、社会政策のことをきいたのは、金井延教授からであったという。教授は明治 23 年の暮に帰朝、大学で「経済学」の講義を始めた。その時のノートの中にドイツの社会政策協会のことについてかなり詳しく述べられているのを見出した。…金井教授からは 25 年から 28 年にかけて講義をうけ」ていた」。[40]

小野塚は学生時代に演説や講演会によく出かけており、金井延の講演会も聴いていた。「小野塚総長の御話によると、先生が予備門の学生時代にいろいろの人の演説や講演をよく聴きに歩かれたそうであるが、ちょうどその時分に博士が外国から帰ったばかりで、新帰朝者として本郷春木町の中央会堂で、ローレンツ・フォン・シュタインを主題として、滔々として独逸学界の情勢を論ずるのを聴いたことがあるとの事であった。[41] このとき小野塚が聞いた金井延の講演は 1891（明治 24）年 11 月頃の「スタイン先生の一周忌」（小野塚一高 4 年生の時）であり、当時の日本で通有であった憲法学者シュタインの学問的印象とは異なった、「社会問題が得意であり、ドイツの社会主義がやかましくなったのもスタインが始めて刺激をあたえたものであり、社会主義殊に講壇社会主義もスタインの考えから出たという」[42]。

小野塚は帰朝間もない新進気鋭の金井延の学問的態度やドイツの社会政策論に影響を受け、師弟関係に近い交流が始まった。高野の回想にある「金井教授からは 25 年から 28 年にかけて講義」は小野塚が大学入学から卒業、大学院への進学の年に当たるのである。小野塚は大学院に入った翌年の 2 月には桑田熊蔵に代わり国家学会雑誌編纂委員になっていることも金井との関係をうかがわせる。

明治 24 年小野塚が一高生の時、１・２・３月に金井延は「現今の社会問題」(『国家学会雑誌』)、「経済学の近況と講壇社会党」(『東洋学芸雑誌』5 月）等を発表している。一高卒業・大学入学した明治 25 年には「政治経済学生の前途」(2 月『一高校友会雑誌』)、「国家経済上の急務」(第 156 号『国民之友』)、等、明治 26 年には、「日本に於ける労働問題」(第 178 号・第 184 号『国民之友』)、「貧困存在の原因」(第 193 号『国民之友』)、「貧民救済策」(第 205 号『国民之友』)、「社会問題の研究」(8 月「六合雑誌）等を発表している。さらに、『法学協会雑誌』(東京帝国大学）と『国民之友』に発表されたボアソナー

40　前掲、「〈社会政策学会〉創立のころ」(社会政策学会 HP)。

41　「逝ける金井延博士」(河合栄治郎『学生生活』日本評論社、昭和 10 年、365 頁)。

42　「スタイン先生の一周忌」(横井時雄編『本郷会堂学術講演』警醒社、明治25年10月)

ド「日本に於ける労働問題」に対して、金井延は11月「ボアソナード氏の経済論を評す」(『法学協会雑誌』1・2月号)と論争を挑み、『国民之友』にも「日本に於ける労働問題」(『国民之友』第178・180号、1・2月)を論じてボアソナードを批判した。「理論的研究と人道主義的社会改革者的情熱をもった」[43]金井延の学外講演会にまで聴いていたことを考慮するなら、小野塚がこれらの論文を読み、学んでいたであろう。

金井延は強烈なエリート主義と学者の指導者意識をもって社会改革を主張した人である。金井延は学者や帝国大学政治経済学生に期待していたことは何であろうか。それは学者また帝国大学政治経済学生が持つべきエリート意識の涵養であり、明治国家の指導者意識と明治国家の先導者であることを鼓舞した。この意味で当時の一高生に向けた講演は注目すべきものがある。政治経済学生の名誉達成感情は国家の事業の先導者・指導者として名誉を得る地位であると鼓舞してやまない。

「政治経済学生は後来名誉を博するを得るの点より益々多望」であり、「国家の進歩は事業の発達と伴ふものなれば将来為す可きの事業益々多くして其前途益々多忙」なるべしと政治経済学生が国家の事業の先導者・指導者として名誉を得る地位にあるために「多望かつ多忙」である。さらに、「政治経済学生は前途純粋の学者となるか、(略)然り而して細密に観察するときは前途尚ほ一の途あり、夫は自から政治の局面に當らず、社会の大勢を観破し、国家の大事を論文に演説に論評して政治當局者を導き之を刺激するものにして自身政治学者にもあらず、去りとて実際家にもあらざる者なり、其の規模は大ならざれども福澤諭吉君の如きもの即ち是なり、之を経世家と曰はんか、社会改良論者と云はんか、然れども此の如き事業は最も困難にして平凡の脳力にて爲し得べからざるなり、此の如き人は蓋し少数なれども社会は此の如き人物に向ても余地を残せり。此の如く政治経済学生の前途は種々なり、各人其適する所を選ばば大に翼を張るを得べし、故に始めより何人に限らず此の者を以て最上と云

43　河合栄治郎「明治思想史の一断面」(『河合栄治郎全集第8巻』社会思想研究会、昭和44年1月、180頁)。

ふが如き方向なし、・・・皆政治経済の学理を研究し之を応用して初めて完全を期するを得べし、此れ政治経済学生の前途「タボウ」なりと云ふ所以なり、故に今日斯学を研究しつゝある人も安心して研究すべし、社会は此種の学生諸君の数多々益々宜しきを認むるものなり、又之より進んで大学に入らむと欲するものは、少しも躊躇することなく政治学科に入れ、政治学科は幾千人の学生をも悦で迎ふ可し（拍手大喝采）」。[44]

小野塚は前年11月頃開催された、金井延「スタイン先生の一周忌」講演会（学外の本郷春木町中央会堂）をすでに聴いている。在学中の小野塚が既知の金井延による一高生向けの講演会「政治経済学生の前途」の聴衆者の一人であったろう。講演終了後「拍手大喝采」した中の一高生の一人ではなかったか[45]。また小野塚が従来から政治学科を志していたとしても、この講演を聴き再度その意を強くしたに違いない。

このような意識は当時の帝国大学法科大学人の共通意志ではなかったか。金井延と帝大法科大学を牽引した5年先輩の和田垣謙三は、すでに明治21年の講演において、学者の存在が国家の指導者としてあるべき強烈な意識を強調していた。和田垣はドイツの国家学者である大学教授の栄誉と地位について、名目は教授に過ぎないが、その隠然たる勢力の波及する所は「上は宰相大臣より下は天下公衆に至るまで皆なその教授を蒙らさるものな」い、学者は「不羈独立利の爲に偏せずせずわたくしの爲に党せず確固たる精神は能く上に諂はず亦故らに之に悖はず民に諛せず亦故らに之と争はず」、「正しきは堂々と之を唱へ正しからざるは侃々之を駁し厳然として能く官民の間に中立し否な官民のうえに社会の外に聳立し社会の奴雁たるの職務を完く」する。「常に講壇の上より吐き出す警戒注意の言論は恰も天使の雲間より発する神託の如く宰相も耳を欹て茅屋の主人も耳を欹て外国の士人も耳を欹て皆正聳然として傾

44　金井延「政治経済学生の前途」（明治25年2月「一高校友会雑誌」、河合栄治郎編『金井延の生涯と学蹟』日本評論社 , 1939、899-900頁より再引）。

45　小野塚が前年11月頃開催された金井延「スタイン先生の一周忌」講演会を聴いていることについては、「スタイン先生の一周忌」（横井時雄編『本郷会堂学術講演』警醒社、明治25年10月）。

聴せさるはな」く、「天下国家の運動の方針を指示するに功ある」のは国会議員の比ではない。「国家学者一人の侃々は群集の囂囂に比して寧ろ重き所あるも決して軽からざるなり否此の如き学者に富める邦国は噫亦幸なる哉」[46]と結んでいる。

金井延・和田垣と共有するエリート主義とでもいうべき思考は小野塚も共有していた。大学院生の時に発表した「政治学の系統」論文結論部分にある政治学徒への誘いがある。アレキサンダー大王が王子の時、父ヒリップが異邦を征服し凱旋を祝った時の故事を引用し、学者は学者は言論指導による一国の帝王の如き存在とでも評して政治学を志すものは政治学の原野を開拓し、学界の燈台となり国民の先覚者となり国家の木鐸たるべきを求めた。

「若し彼れアレキサンダーをして上下二千歳を隔てたる今日に再生し、政治學ノ研究に従事せしめたらんには彼必ずや欣喜雀躍して其前途の洋々たるを賀するならん、盖し彼れの征服し得べき版図は広大無邊なればなり、故に苟も一身を真理も研究に委せんと欲するの士は、此前途茫々たる政治學の原野を開拓し、以て學界の燈台となり、國民の先覺者となり、爲政家の木鐸たらんこと、豈快ならずや、（中略）政治學の研究は其必要此の如く大に、愉快亦大なると同時に其範囲非常に廣く、其困難頗る多くして、英才卓識の士と雖一朝一夕にして良好の結果を收め難し、況んや不省予の如き者安んぞ獨り此大任を荷ふに堪ゆ可けんや、予は諸君の中、十九世紀の終り二十世紀の始めに於て、政治學界のアレキサンダーを以て任ずるの人あらんことを希望し、敢て其驥尾に附し、聊か此學の爲め、此國の僞め応分の力を致さんことを期するのみ、謹て諸君の清聴を汚せしを謝す」[47]。

これは明治29年9月発表、おそらく国家学会での講演筆記であり小野塚は翌年文部省より政治学研究のために留学している。東京帝国大学で政治学を担う予感と気概に基づいた講演といってよく、金井延や和田垣謙三の講演に呼応した講演でもあろう。

46　和田垣謙三「講壇社会党」（『国家学会雑誌』2巻13号、明治21年、142-143頁）。
47　小野塚喜平次「政治学の系統」（『国家学会雑誌』第10巻第116号、明治29年）。

金井延は自らの社会政策主義の立場を明治24年に「経済学の近況と講壇社会党」の中で明らかにしている。そこではミルなどの旧派経済学は社会に関する諸学の最も盛なる独逸國などでは已に五十年來全く打破られたもであり、自らの立場は独逸自由貿易派と独逸民主主義社会党を批判しその中間、過激でもなく絶対的放任主義でもない中間派であるという。

「而して最新経済学派の人と云ふ者は此二つのもの丶中間にあり、一方に於ては過激主義の社会党にも偏せず他の一方に於ては絶対的放任主義にも辟しない即ち中を得たるものであります。此輩過激主義を排斥すれども若し社会の弱者が経済上の変遷に依りて大に難渋する場合があらば宜しく法律を以て之をほごすべし、貧民共が経済上の組織の関係法律の関係よりして非常な弊害を資本家などから蒙むる時は宜しく規則を設けて之を救ふべしと云ふ（以下略)」。[48]

「今日の有様では欧米に於ては旧派の経済学は最早全く衰退して僅に息の根が通ひて居る位な話で早晩全く死に絶えるに相違ない、（中略）日本の経済上のことを研究する人は何処までも日本の歴史事実を研究するが宜いが西洋の経済学を併せて研究するには宜しく経済学の新たなる最も進歩したものを研究したいものである、さうして彼の田舎娘が束髪をして得々として居るやうな真似はしないが宜い」[49] という

「日本の経済を論ずる者が尚ほ旧派の主義を採りてミル、フォーセットを金科玉条として居るのは恰も田舎娘が三四年前に東京に流行した束髪を得意として居ると同じことである」。[50]

同じ講演で二度にもわたって金井延の言う旧派的立場を「田舎娘」とまで酷評した。金井延はドイツで最新の社会政策学を学んできたという学問的矜持のみならず、日本の労働現場を実地踏査し実情にも通じていたという自負もあっ

48　同上、437頁。

49　金井延、「経済学の近況と講壇社会党」(『東洋学芸雑誌』明治24年5月、河合栄治郎『金井延の生涯』(日本評論社、昭和14年、440頁)。

50　同上。金井延「経済学の近況と講壇社会党」(『東洋学芸雑誌』明治24年5月、河合栄治郎『金井延の生涯』(日本評論社、昭和14年、424頁)。

た。帰朝後、「講演や寄稿の外に盛んに諸方の見学旅行を試みた。先ず東京近傍の工場を視察し殊に女工の寄宿舎の生活や雇入の状況を調査し、次いで京阪地方では大阪、神戸の零細工場を廻り、後には東北、北海道に出向き、殊に工夫の生活を注意した。彼は独逸や英国で実地見学をするにつけて、日本の実況に暗いことを感じたからであろう、又やがて起こらんとする社会問題に対して、実際の智識を備えて置く必要を感じた」[51] のである。

金井延はドイツで学んだ最新の社会政策学と日本の労働現場の調査に基づいて、明治 25 年 12 月と翌年 1 月）ボアソナードに反論をした。労働問題に関するこの論争は「代表的なものであり」、「政府の最高の法律顧問であった仏国人ボアソナードと東京帝国大学教授金井延の間で行なわれたもの」[52] と評される。

金井延の主要な論点は、日本は既に労働問題は起きているか否か、労働者の自衛手段として同盟罷工などを認めるか否か、労働問題に関する国家の干渉の是非の問題に絞って批判した。ボアソナードはこれらに肯定的であった。
金井延にとっての労働問題とは「富の分配」に由来するものであり、「方今歐米經濟學者の間に所謂ゆる労働問題なるもの、真相を十分了解せざるなり」と経済学者の労働問題論を批判したのち、

「方今の所謂勞働問題は一に之を社会問題と稱し專はら富の分配其宜しきを得ず貧富の懸隔其の甚しきに達し爲めに社会の秩序を破壞し國家の安寧を妨害するの恐ある傾向に関するる重大問題にして其の骨髓たるものは所得の不平均と勞働者自身幷に社会全体が之を知覚するに在りとす而かるに本邦には多少所得の不平均あり貧富の懸隔之なきに非ずと雖も勞働者自身の之を知覚し社会に對し不満を抱くもの殆と絶無なり社会全体も亦一般に勞働者の事に對し頗る冷淡なり僅かに一部のもの丶間に之に注意するものあるのみ勞働問題の種子は既に之ありと謂ふを得べし未だ以て其の既に全く起れるを説く可

51　河合栄治郎『明治思想史の一断面』（『河合栄治郎全集』第 8 巻、社会思想社、昭和 44 年、158-159 頁。
52　「『国民之友』における社会問題論」（『キリスト教社会問題研究）18 号、1971 年 3 月、166 頁）。

らざるなり故にボ氏の以て労働問題の既に本邦に起れりと爲すは大に謬れるにあらざれば其の所謂ゆる労働問題なるものは通俗の労働に関する一切の問題を稱して労働問題と曰ふものたるに過きざるべし今の経済学上に所謂労働問題に非らざるなり。」[53] 貧富の拡大が社会秩序を破壊し、ひいては国家の安全を不安に至らせるまでになる重大問題と危険視している。こうした事態に「冷淡」な現状への憂えは小野塚が新聞社会にもった「冷淡」感情に通じている。というより、小野塚が金井延の判断に基づいて投書をしたとも考えられる。『国民新聞』は労働問題・社会問題を報じているのであり、「冷淡」という批評は受け入れられず、「没書」の一因でもあろう。

金井延は社会政策的立場から労働立法を積極的に主張したが同盟罷工には反対した。ボアソナードの「同盟罷工は政治上並に社会上の改良革命のうえで効力がある」という主張を批判した。

「同盟罷工を弁護するものにて政治上並に社会上の改良革命の必要なるを説くと同一論法なり余輩豈に敢て之に同意するを得むや同盟罷工は稀にボ氏の謂へるが如き功を奏することある可しと雖も労働者の之に因りて得る所は果して克く其の失ふ所と経済社会全体の損害とを償ふ可きや智者を待たずして知る可きのみ労働時間を減少する必要果して之ありとすれば之を爲すには他に良手段の在るあり何ぞ必すしも同盟罷工の如き毒薬を用ふるに及ばむや労働問題にして社会全体に取りて必要となり世人一般に之を研究せざるを得ざるに至らば否なそれ程までに至らざる前既に政府の之に注目するや必せり同盟罷工を待て始めて覚るが如きは今日の學術進歩の世の中に在りては政府の最も不能なるものなり世間幸にして斯くの如き政府多からざるなり惟ふに労働問題を研究するもの、目的の一とす可き所は同盟罷工の如き害毒を豫防し之をして起こるの必要なからしむるに在らむ其の稀に労働者に取りて幾分か目前の効力あるを見て直に之を辯護し其の永遠に非常の損失を醸成するを察せざるは徒らに革命的の亂暴を快とするダントンマラーの輩に在りては怪む

---

[53] 金井延「日本に於ける労働問題」(『国民之友』178号、明治26年1月)

に足らずと雖も博学多才のボ氏にして之に類似の語気あるは惜む可きの至にこそ蓋しボ氏の真意は此に非らずして彼に在らむ労働者を憫むの極遂に知らず識らず同盟罷工の極端手段をも辯護するに至りしならむ非歟」。[54]

すでに述べたように金井延には労働運動に「國家の安寧を妨害するの恐ある傾向」を見、重大問題であり、この意味で「社会全体も亦一般に労働者の事に對し頗る冷淡」と断じたのである。それゆえに、金井延と現状判断を共有する小野塚の投書は労働者主導の同盟罷工肯定論の報道批判ではなかったか。金井延が学んできた社会政策的、政府主導の積極的な対応を求めるものであった。金井延は漸進的な政府主導の社会政策論者でかつ社会改革論者であり、金井延の立場は究極的には「惟ふに労働問題を研究するもの、目的の一とす可き所は同盟罷工の如き害毒を豫防し之をして起こるの必要なからしむるに在らむ」にあった。その理由はなによりも革命的動きが出現することへの警戒感であったからである。

民友社は金井延とは明確に異なり、労働者の力による労働条件の改善を認める主張をした。それゆえに労働者の同盟罷工を認め、労働条件の改善のために職工条例、工場条例の制定を要求した。大同盟罷工（ストライキ）の歴史は何を教ゆるか」では、労役者・被傭者の同盟罷工によって労働条件の改善を勝ち取るのは労働者の「権利」であるとして積極的にその意義を認めている。同盟罷工が社会全体の損失が大であるが有害とは言えない。労働条件の改善はその損害に比較してはるかに優れており、それ故に同盟罷工は必要である。労働者は同盟罷工によらなければ権利を主張できないと。[55]

また労働者保護立法の問題についても、労働者のための具体的行動、具体的事業の開始を呼びかける。

「今や労働問題を叫ぶの時は、已に去れり、実際の施設を以て之れを解決すべき時なり」、「労働問題、社会問題を口にするも、吾人之を信せず」。さらに、

---

[54] 金井延「日本に於ける労働問題」国民之友 178 号明治 26 年 1 月。
[55] 「大同盟罷工の歴史は何を教ゆるか」（『国民之友』第 171 号、明治 25 年 11 月 3 日）。

「工場の立法」では、工場の建築・衛生上の立法、災害発生の時の被害者の生命保険、傷害保険の強制立法など具体的工場条例の制定を要望している。工場条例に反対する資本家を「中には職工を奴隷と分たずして、唯だ之を駆使するのみを可として、敢て保護するの要なきを答へんとするものありと。此の如きは是れ人の肉を食ふ者にして、貧富の間の争乱を激発するの張本人也」と激しく攻撃を加えている。[56]

当時の民友社『国民新聞』『国民之友』の主張は労働者・被用者の同盟罷工を辞せずしてその労働環境・職場状態を改善すべきというものであった。こうした主張は最終的には、社会問題、労働問題を政治的課題として、政党による対政府闘争、政党間の主導権争いを引き起こし政治問題に至るであろう。『国民之友』と『国民新聞』自らが提起した社会問題が言論を指導し、新聞各紙が追従し、ついで政党に広がり政党間で政策課題となるに至り、対政府との権力争奪の手段化ともなった。自らが提起した社会問題が政治問題になった事実を『国民新聞』は自負している。

コラム「大勢一斑」の「社会問題の反響」で「最も新奇なる顕象は◎社会問題の反響」であり社会問題は「国民之友、国民新聞の熱心に提起せんとせる所也」と言論を指導したという。

「大勢変動の兆しは過る一ヶ月間に於いて、著しく現はれ来れり。曰く社会問題の反響。政治上の地位の変化。・・・中に就きて最も新奇なる顕象は◎社会問題の反響也。社会問題は国民之友、国民新聞の熱心に提起せんとせる所也、其如何論じ、如何に之を刺激したるか、世人はなほ未た之を記憶するならん。而して過る一ヶ月に於て、反響は四方より来れり。」この結果関西自由党による労役者保護法、および小作条例設置の綱領化、自由党や東洋自由党の主張にも波及している。朝野新聞も社説で論じている。改進党はいまだ「此問題に向つては寂として聲なし」の状態である。「彼れ豈に此問題を蔑視する乎。抑々また小民に向つて同情を欠く乎。国民新聞は隙さず、改進党に注意を

56　『国民新聞』記事内容については、前掲，佐々木敏二、170頁による。

與へて曰く、社会問題は民党の問題ならざるべからず。改進党にして之に注意を怠らば、他日他の民党と併進するの時に方つて、思はざる不便あらんと。吾人は信ず、民党の連鎖は、堅牢、鉄の如しと。然れども他日萬が一にも、各派の相支吾するが如きことあらば、其隙を開くものは、必ず此の如き問題に同情を表すと表せざるとの起因せん。改進党の士、何ぞ之を察すせざる。仮令此問題によりて利する所小なるも、同情問題に向つて同情を表するは、愛民政治家の侠心也。改進党が、天下に向つて侠心を具ふるを発揮するの機会は、実に今日ある也」。[57]

社会問題が政治問題化し政党内論争ひいては政党間論争へと展開するからこそ「社会問題研究会」設立の主張も出現する。「社会問題の新潮」(『国民之友』第169号社説、明治25年10月)は「新たに社会問題研究会を組織すべし」と論じている。当時自由党左派民権家のなかに社会問題を積極的にとりあげようとする気運がたかまり、11月19日に結成総会をした「社会問題研究会」はこの動きの一つであった。[58]

小野塚は労働者主導のもとで争議・革命まで辞さないその積極的運動が社会騒乱などをもたらすことを認めることはできなかった。その立場はグラハム抄訳前書き「彼の見解は優に英国著者の特色たる常識に富む幾くは穏当着実と云ふを得んか今筐底より出して本誌の余白に充つ」でも明らかであり、同じく抄訳最終行にある、「徒に奇説を好み急変を望み十分の心算なくし一世を挙げ危険なる試験に供するが如きは真に生民を愛し進歩を希ふ者の敢て為すべき所にあらさるなり」る、に通底するのである。

金井延も小野塚も社会問題・労働問題の過激化や政治問題化に至ることを回

57 コラム「大勢一斑」(『国民之友』第172号、明治25年11月13日)。

58 前掲、佐々木敏二、170頁。この社会問題研究会は、多数労働者の窮乏を救済し、その権限を扶立する方策を求めることを目的として、自由党の機関紙「自由」の記者である佐藤勇作、大道和一、上野岩太郎らと中江兆民門下の酒井雄三郎、小島竜太郎らによって組織されたものであるが、「社会主義は、我党の自由主義と相戻る所なり」とする板垣の方針とあわず、上野らが自由党から離れざるをえなくなっだことなどが影響し、自然解散となつた。

避するために行政的な立場の社会政策的立場を主張したのであった。「貧富の争乱激発」せざるためにも、学者の指導の下に政府が政策を施すべきであるとした。それゆえに、『国民之友』で述べられた「社会問題研究会」は小野塚が投書で主張した「社会問題研究会」とはその性質が異なっていたことは明らかであろう。

民友社は『国民之友』『国民新聞』で明治23年春以来ほぼ3年間、社会問題への注意を喚起してきたのであり、小野塚が「新聞社会が社会問題に対して今日の如く冷淡に済し得るの日」は明治26年に入り社会問題への関心が薄まり、とりあげなくなった新聞社会の状態であった。それは労働問題・同盟罷工問題が社会的問題から政治的問題へと変化することで労働者側内部や政党内部の路線対立問題に由来する混迷の結果ではなかったか。

おわりに

従来、小野塚喜平次の政治学的研究は『国家学会雑誌』に発表された「政治学の系統」に始まっていた。拙論で紹介・検討した郷里長岡で発表された社会問題と社会主義論に小野塚政治学成立の研究対象外であった。この時期の小野塚の抄訳と投書は、彼の政治学および学問的関心の発端を語っている。抄訳『社会主義新旧』は「社会問題研究会」設立提案投書との一連の小品とも考えられ問題意識の連続性を示している。抄訳をあえて2年後に発表したことは、矢部貞治が述べた以上に小野塚の社会問題と社会主義のへの関心が深かったことを示している。ここに小野塚の政治と社会への関心の深さ及び政治思想の原型を見出すことが可能である。投書という制約はあったが、「東邦協会」「日本」「国民新聞」などの語句を手がかりに、小野塚の学問的胎動期に師ともいうべき金井延の影響、グラハム“SOCIALISM NEW AND OLD”を介在して徳富蘇峰とのある意味の関わりも明らかとなった。

郷里長岡で発表した所論と「政治学の系統」論文以降、とくに『政治学大綱』との細かな検討にはおよばなかったが、概観すると『政治学大綱』やその後の研究に連なるモチーフの端緒が見出されていた。また、金井延による小野塚へ

の影響を示したが、大学の講義のほかに当時の出版状況を考えるならば、金井延が『国家学会雑誌』等に発表した論文、講演筆記にも触発されたことは否定できないであろう。

小野塚を師と仰ぐ南原繁は自分の勉強方法について次のように語っている。「先生の列挙された本を図書館で探し出して読むのが非常に楽しみでした。そのころは今のように政治に関するたくさんの書物があったわけではないし、いわんや総合雑誌などない。『国家学会雑誌』と『法学協会雑誌』くらいなものですからね」。[59] 研究を志す者の言葉を示して余りある。小野塚と 20 歳離れた大正３年帝国大学卒業の南原にしてこの言である。日本初の当時としては画期的な労働組合法案作成に尽力した南原の学問的背景にも、小野塚喜平次の初期小品「社会主義批評両三片」「識者何ぞ速に社会問題研究会を組織せざる」で育まれ、後に『国家学会雑誌』と『法学協会雑誌』に発表し続けた「衆民政」の立場に基づく諸論文の学びがあったのではないだろうか。

59　丸山眞男・福田歓一編『聞き書き　南原繁』（東大出版会、1989 年、19 頁）。